

# 「魚のゆりかご水田」による環境再生・地域再生

JAグリーン近江と栗見出在家町

研究員 寺林暁良

## 1 環境再生を目指す「魚のゆりかご水田」

グリーン近江農業協同組合(以下「JA」)は、営農指導・地域指導や米の販売を通じて東近江市栗見出在家町の自治会が行う「魚のゆりかご水田」の取組みを推進してきた。両者が協力して進めるこの取組みは、環境再生だけではなく、米のブランド化や地域再生など、様々な効果を生んでいる。

「魚のゆりかご水田」プロジェクトは、琵琶湖の魚が産卵・成育できる水田環境を再生するために滋賀県が始めた取組みである。琵琶湖周辺の水田は、用排水路を通じて往来する琵琶湖のフナ、コイ、ナマズなどの格好の産卵・生育の場であったが、圃場整備が行われた60～70年代以降、水田と水路には落差ができ、水田の湖魚繁殖場所としての機能が失われた。特に、琵琶湖の固有種であり「ふなずし」の原料ともなるニゴロブナの漁獲量は、湖内での外来魚増加と相まって、この40年で10分の1以下にまで減少した<sup>(注)</sup>。そこで、水路に堰板<sup>せきいた</sup>を設置して水田排水口と水路の落差を10cm以下に抑えた魚道を作ることで、生物が移動できる環境を整えようという取組みが求

められたのである。

取組みは01年に水田の生態学的調査や魚道開発から始まり、06年には栗見出在家町をはじめとする県内各地で魚道設備の設置が開始された。この取組みは、現在県内26地域、113haに広がり、09年には全国知事会「先進政策大賞」を受賞している。

## 2 栗見出在家町における取組み

栗見出在家町は、東近江市北端に位置し、琵琶湖に面する約100戸(うち農家は約8割)の集落で、町内40haの水田のうち20haで「魚のゆりかご水田」に取り組んでいる。これは1ヵ所での取組みとしては最大規模である。主な取組み作業は魚道作りや堰板の設置などであるが、魚の観察会、環境勉強会なども行われている(第1表)。

これらの作業・行事は自治会、つまり非農家を含めた全戸で行うこととしている。町はこれまでも幼稚園児・小学生によるニゴロブナの放流事業等に携わってきた経緯もあり、「魚のゆりかご水田」を環境教育の取組みとしても位置付けている。

取組みには県から補助金が出され、作業自



水田で産卵する湖魚

第1表 「魚のゆりかご水田」の営農歴

月	農作業	「魚のゆりかご水田」作業
4	育苗	魚道作り・堰板設置
5	代かき・田植え 基肥・除草剤	稚魚放流・田植え体験
6	溝切り 中干し	魚の観察会・環境勉強会 堰板撤去・生き物調査
7	穂肥	
9	収穫	米の試食会



「魚のゆりかご水田」取組み風景

体も通常の営農暦に合わせて行われるため、農家の負担は大きくない。また、滋賀県内は、農薬・化学肥料の抑制が進んでおり、町内でもそれらの使用量を50%以下に抑えた「環境こだわり米」作りがすでに進められていた。

農作業として特徴的なのは、中干しまでの期間は通常よりも水田内の水位を高くすることで、魚の成育を助けていることである。また、代かき前に水路に堰板を設置することで濁水流出を抑制し、琵琶湖の水質対策にもつなげている。JAは、自治会の取組みに一体的に参加するとともに、堰板設置や水位調節に合わせた米作り指導を行い、農作業のサポートを行っている。

### 3 「魚のゆりかご水田米」のブランド化

環境保全に取り組む水田で生産された米は全国各地でブランド化されており、兵庫県豊岡市の「コウノトリ育むお米」、宮城県蕪栗沼の「ふゆみずたんぼ米」などが有名である。

この取組みで生産された「魚のゆりかご水田米」は、大型量販店と販売契約がされてお

り、ブランド米として付加価値がつけられ平均的な値段よりも高く販売されている。現在は流通量が少なく、流通圏も関西に限られているため、今後、県全体の取組み規模が拡大することにより認知度が上がり、さらにブランド価値が高まることが期待されている。

また、生産者やJAは、“環境”の取組みとしてだけではなく“農作物”を作る取組みとしてのアピールをさらに強め、滋賀県の農作物全体のブランドイメージ向上につながるように仕掛けていきたいと考えている。

### 4 「魚のゆりかご水田」がもたらす地域再生

自治会やJAが「魚のゆりかご水田」の取組みで環境再生、米のブランド化とともに重視しているのが、「地域社会の再生」という効果である。取組みにおける共同作業や学習会は、大人と子どもの世代間交流の機会となっており、地域の「顔の見える関係」の再生につながっている。また、地域の社会関係が再生されると同時に、一体となって取組みを推進するJAも地域とのつながりが深まっている。

そして、「魚のゆりかご水田」の取組みは、次世代への地域環境の受渡しもある。圃場整備以前の水田を知る人は誰もが水田で魚をつかんで遊んだ体験を持ち、取組みの参加者は、子どもたちにもこうした遊び・学びの体験をして欲しいという思いを持っている。農の現場に地域社会のにぎわいが戻り、それが次世代へと受け渡されることは、地域社会にとってもJAにとっても明るい材料である。

「魚のゆりかご水田」の取組みは、環境再生と経済・社会の活性化を両立させる取組みとして、大きな示唆を与えてくれる。

(てらばやし あきら)

(注) 滋賀県ニゴロブナ資源回復計画(2006年10月6日)。

写真は、JAグリーン近江の安孫子雅則職員の撮影による。